

1960年代の私にとって、世界はアメリカと日本の二つだけでできていた。帰国の期限が迫ると、私は岩倉使節団のようにヨーロッパも見てみたいと思うようになっていた。当時小田実も江藤淳もヨーロッパをまわって帰国していた。今ヨーロッパを見なければ一生ヨーロッパをこの目で見ることはないだろうと思えた。しかし、それに必要な旅費はなく、岩倉使節団のように旅行日程を勝手に伸ばせるわけでもなかった。フルブライト委員会に相談したところ、ヨーロッパまでは行けないが、アメリカを見て帰る計画を認めてくれた。

ニューヨークから鉄道でボストンへ北上し、さらにカナダとの国境を越えてモントリオールに向かい、トロントからナイアガラの滝を越えてまたアメリカに戻る。シカゴからは南に向かいセントルイス、ミシシッピ川にそってニューオーリンズに至る。そこから西部劇の舞台でもあるテキサス。石油の街ヒューストンを経てロサンゼルスにたどり着くという壮大な計画を提出して支援してもらうことになった。

アメリカにも日本の時刻表のように全国の鉄道のタイムテーブルを網羅したものが当然あるものと思っていたら、ユニオン・パシフィックとかセントラル・パシフィック、あるいはカナディアン・パシフィックという鉄道会社をまわって時刻表を集めなければならないので、大変であった。

アメリカ大陸横断旅行といっても学生の貧乏旅行である。泊まる場所はYMCA、あるいは留学生交換計画を支援するボランティアの家に泊めてもらうというもので、ヒルトンにもシェラトンにも一泊もすることはできなかった。

モントリオールにはマクギル大学という英語の大学とモントリオール大学というフランス語の大学があった。映画館に入ったら映画はフランス語であった。ナイアガラの滝ではその大きさにも驚いたが、この滝を樽に入って飛び降りたアメリカ人がいると聞いて、アメリカ人の冒険心に圧倒された。

デトロイトではフォードの自動車工場でベルトコンベアに乗った車が次々と組み立てられていくのを見た。パーツが次々に取り付けられていってベルトラインの最後まで来ると命が吹き込まれたかのように自動車が動き出すのである。それを見て感激したが、チャップリンのモダンタイムズのアメリカを、この目で見てしまったような気がした。

ニューオーリンズで泊まったホテルには深いバスタブ（湯船）があって、フランスの古い面影を留めていた。考えてみたらニューオーリンズのあるルイジアナ州は、およそ150年前（1803年）にアメリカがナポレオンから買った土地である。プレザベーション・ホールでジャズの演奏を聴いた。そこは日本の村の公民館のようなしつらえの建物だったが、聖者の行進はグリニッジ・ビレッジのジャズとは違って、また心がはずんだ。ジョージ・ルイスのクラリネットも印象的だった。クラリネットはプレザベーション・ホールのような小さな小屋で聞くのがふさわしい。

テキサスを通ったときは夜だった。朝起きて、ここはどこかと聞いたら、ここもまだテキサスだと聞いてアメリカの広大さにあらためて驚いた。ところどころに石油掘削機が見えた。ポンプで石油をくみ上げるその機械はカマキリに似ているところからグラスホッパーと呼ばれていた。牛も放牧されていた。この一帯は降水量が少なく、牛を放牧する頭数は降水量によって異なるという。降水量の比較的多いところは牧草も育つので単位面積あたりの放牧数をふやすことができるが、降水量の少ないところでは放牧数は限られるというのだ。おおまかな話だが、

グランドキャニオンを通過してロサンゼルスにたどり着いた。グランドキャニオンはコロラド河の浸食によって削り取られた地層が一目で眺められ、学校で教わった地質学の学説は本当だったんだと初めて納得した。私が立っている地上とコロラド河に削られて地面との高低差は1200メートルもあり、地上は砂漠だが谷底は気温が違うためか緑が広がっていた。

ロサンゼルスでは現在の上皇夫妻も皇太子時代に行ったというディズニーランドに行ったが、私はまだ独身だったので、パートナーがいた訳でもない。

そこからハワイを経由して日本に帰国することになる。これで私の「アメリカ昔日譚」はおしまいになる。ハワイから日本に向かう飛行機は偏西風に逆行するため行きより少し時間がかかる。当時日本人は外国へ行くと必ず免税店でジョニーウォーカーを制限量のぎりぎりまで買うため、満員の乗客を乗せた日航のプロペラ機DC7はウエーキ島で給油しなければならなかった。ウエーキ島は飛行機の滑走路がかろうじて作れるだけの小島で、飛行機の窓からは太平洋戦争中に沈められた日本軍の船の残骸が、まだ海岸に打ち上げられている姿が見えた。

帰国してしばらくの間は、小林の英語は American English あるいは Vulgar English だとして、保守派からは軽蔑の眼で見られていた。しかし、しばらくするとNHKの主催で世界各国から放送局の要人が百数十名参加して開かれる世界会議が東京で開かれることになった。会議は日本語—英語—フランス語の同時通訳で行われることになり、私はその準備のために約1年間事務局として便利に使われることになった。そこではじめて、私のジュエッシュ・アクセントのあるニューヨーク・イングリッシュの方が、模範的な学校英語よりはるかに有用であることが認められた。イギリスBBCの代表が「小林君は英語をどこで学びましたか」「ニューヨークで少し勉強していたものですから」「でも、アメリカン・アクセントが気になりませんか」というようなことを言ってくれたからであった。しかし、それは私が正しい Queen's English を話せたからではなくて、アメリカ英語の r をうまく言えなかったからだと思う。

その後、空の旅はまもなくジェット機の時代となり、アンカレッジ経由でニューヨークに行けるようになり、ヨーロッパにもアンカレッジ経由の便が一般的になった。アンカレッ

ジで給油する間、空港で立ち食いのうどんを食べるのも楽しみのひとつであった。それが今ではアンカレッジにも寄らず、ニューヨークやロンドンへの直行便が当たり前の時代になった。まさに昔日の物語である。

ヨーロッパとアメリカの間は超音速旅客機コンコルドが運航されたこともある。普通の旅客機が軍事用の輸送機を改良したものだとなれば、コンコルドは戦闘機のようなものであった。私も一度だけロンドンからニューヨーク行きにのったこともある。ヒースロー空港を飛び立ったコンコルドは海上へ出ると速度をマッハ2にあげる。横田基地の上空などを飛ぶジェット戦闘機のような音を出すので、陸上は超音速で飛ぶわけにはいかない。私は旅行用トランクを持ち込んだが、客のほとんどはロンドンにもニューヨークにも自宅のあるビジネスマンのようで、着替えのスーツを持っただけの人が多かったのが印象的だった。そのコンコルドも騒音公害や燃費効率の悪さのために運航が停止されてしまった。

【予告編】

第8話 アメリカ再訪

第9話 アジア回帰

第10話 アメリカ NOW